

# 翻訳者に求められるターミノロジー処理力



## ●プロフィール

小坂貴志（こさか・たかし）  
立教大学経営学部特任准教授。  
BABEL UNIVERSITY 企業研修講師。日本アイ・ピー・エム株式会社勤務後、渡米。デンバー大学人間コミュニケーション研究科修士課程修了、博士課程単位取得終了満期退学。モントレー国際大学院助教授を経て現在に至る。

## 「ターミノロジー処理」とその課題とは

本稿でとりあげるターミノロジー処理は、テクノロジー周り（古典的には、紙・電子辞書・オンライン辞書による定訳決め。メモリーツールによる新出用語分析、定訳決め、辞書登録、辞書管理、メンテナンス）のものではなく、概念的な用語管理にまつわる話題である。なぜそうなるかは、私のテクノロジーに対する理解度の低さによるともとれるし、個人的な興味によるところもある。

結論を言ってしまうと、ターミノロジーに対する意識向上をはかる、ということが本稿の具体的なトピックとなる。また、日頃、翻訳スタイルガイドを参照するのに慣れている方は、自分で一からスタイルガイドを作ってみることをお勧めする。そして、ターミノロジーに関する具体的な翻訳者（家）の課題とは何かとたずねられたら、それは「何をどこまでどのように統一するか」の一言に尽きてしまうだろう。それでは以降、IT系翻訳、文芸翻訳という両極端なジャンルにおける例をとりあげていきたい。

以前働いていたインハウス翻訳部にて、スタイルガイドの作成に関わったことがある。ほぼ何もないという状態から徐々に版を重ね、厚みが増していった。試行錯誤の積み重ねでスタイルガイドを作った経験が、その後のターミノロジーや翻訳一般に対する管理手法導入への一助となったのは言うまでもない。

IT系翻訳のスタイルガイドで中心的位置を占める項目の中に「カタカナ表記」があげられる。勤務する会社がマイクロソフト系だったこともあって、マイクロソフト社の表記スタイルには忠実であった。だが、カタカナ表記については、一般的な表記と矛盾する点もあって、全面的に賛成できるものではなかった。

2008年7月25日、マイクロソフトは翻訳にかかわるターミノロジーに関する重大な発表をおこなった\*。これまでカタカナ用語の語末長音を省略するという方針だったのが、コンピューターのメモリー容量制限の懸念がすくなくなってきたため、それを元に戻す、つまりこれまで語末長音を省いていたものを、語末長音をつけようとする方針転換である。

語末長音を省くという翻訳規則は、読者の皆様には釈迦に説法であることを承知でご説明申し上げますと、いろいろな例外を孕んでいることで知られている。まあ例外とは何の規則にもあてはまることなのだが、カタカナ用語の語末長音を省くことが決まった初期の翻訳にたずさわっていただけに笑えない例外もある。

**翻** 訳業界を揺るがすカタカナ用語

**「エラ」**、「コピ」

説明するまでもなく、error, copy のカタカナ語から語末長音を省いたものである。これは誰が見てもおかしい。よって、語末長音を省いた結果、二音節になる用語は例外、ということが規則として定められた。

## 「ゆ」うざ

「ゆ」にアクセント記号がおかれた単語が頻繁にプレゼンテーションに登場する。とある小学校の公開授業での出来事である。「“ゆうざ”って何？」と疑問に思った筆者の妻は、「ゆうざ」なるものを数度聞き、ようやくそれが「ユーザー」であることに気づいた。その通り。カタカナ用語の語末長音の規則からすると、「ユーザ」。これを小学生が何の知識もなく普通に読めば、「ゆうざ」で「ゆ」にアクセントをおくようになってしまう。

語末長音が表記と発音が異なるという決定的な悪を生み出しても、我々日本人は平気な顔をしていた。これは一歩間違えば、重大な日本語の欠陥となるところだったが、マイクロソフト社の勇断のおかげで、間違った方向にこれ以上進む必要がなくなった。

さて、ターミノロジー処理と書けば、誰でもが狭義ではIT系翻訳、広義ではビジネス翻訳をふさわしいジャンルと結び付けようが、それ以外のジャンルにおける翻訳でも用語をいかにして統一していくかは、必須作業のひとつでもある。ただ、そのアプローチは他の分野ほどには画一的でないのが大きな違いではないだろうか。

## 翻訳家の「気分」としてのターミノロジー

東京外国語大学の現学長でロシア文学研究者の亀山郁夫氏の講演会を聞く機会があった。村上春樹氏の『キャッチャー・イン・ザ・ライ』によって新訳ブームに火が点いた時期もあって、光文社刊『カラマゾフの兄弟』は日本社会で発生した

幾多の事件にいくばくかの説明を与える作品であるとしてミリオンセラー入りに近づいた。

同書が発刊されるや、ドストエフスキーの信奉者によって誤訳が指摘された。著者が驚いたのは、亀山氏が講演会をこの誤訳問題の話題によって口火を切った点だ。念願だった同書が発刊され、売上も好調だったことから気分は最高といったところだったが、誤訳を指摘され、それによって精神的にも打撃を受け、一時はうつ状態にも陥ったとのことである。その誤訳の内容を検討してみると、全体を通して3箇所は完全な「読み違い」であったものの、そのほかについては誤訳ととられるべき箇所ではないのではないかと、という氏の考えである。

そのような箇所については、「翻訳者の気分」、「翻訳の勢い」、「流れ」といった言葉で説明している。たとえば、副詞がある。ロシア語が原語なので英語におきかえて説明すると、suddenly という副詞が頻出するようなのだが、これに対して、翻訳書にして5巻もある作品の第1巻から最終巻まですべてに「突然」という訳語をあてるのはいかなものだろうか、というのが氏の考え方である。著者もこれには賛成で、いかに原語に価値がある作品であっても原文主義を貫こうものなら、新訳として現代社会に最適で、そして翻訳の勢いというもの、原文の流れというさまざまな要因をも含んだ新たな価値を創造することは不可能である。原文の構造維持を重んじた作品はすでに翻訳作品としてあるわけなので、新訳としての意義を追求することの方が重要ではないだろうか。

この例が示しているように、たとえひとりの中で作業が完結しようとも、翻訳者はそのときの気分（ここで言っているのは、翻訳に対する思い入れや流れの中から滲み出てくる訳）によって、言葉に若干のぶれがでてくるのは当然のことであると結論付けられる。

\* 「マイクロソフト製品ならびにサービスにおける外来語カタカナ用語末尾の長音表記の変更について」<http://www.microsoft.com/japan/presspass/detail.aspx?newsid=3491> を参照のこと。